

〈論 文〉

「場」のある日本語と日本文化・ 「場」のない英語と英語文化-(2)

Interpreting the Concept of “Ba” through a Comparison of Japanese Language and Culture and English Language and Culture -(2)

尾 野 治 彦

Haruhiko ONO

1. はじめに

前号では、「場」のある日本語の「知覚感覚体験」と「場」のない英語の「Figure/Ground 認知」の観点から、日本語の小説や絵本では、「時」, 「場所」, 「状況」といった「場の枠」の設定表現が好まれるが、英語ではそうでないこと、また、映画ポスターでは、日本語版では映画の「場」全体のコトが反映された画像やタイトルになる傾向があるのに対し、英語版では「場」が存在しないため、コトではなくモノである人物中心の画像やタイトルとなる傾向にあることを指摘した。

本号では、「場」の日本語の更なる特徴として、「間」, 「気」を含む表現を対応する英語表現と比較しながら、これらの表現が、「場」の「空気

や雰囲気」を表していることを示したい。また、「場」の「空気や雰囲気」を把握対象とすることが、話し手と聞き手の「場」の共有と相まって、日本人の同調的な行動様式につながることを指摘したい。

最後に、「実在」をめぐるの、日本人と欧米人との違いについても、日本語の「知覚感覚体験」と英語の「Figure/Ground 認知」の事態把握の違いが関わっている可能性についてもふれる。

なお、本号は前号に続く内容であるが、セクション分け等については独立したものとする。

2. 「共有される場」と「共有される知覚感覚体験」

「場」の日本語においては、話し手と聞き手は「同一の場」にいることになるが、このことに関連することとして、すでに次の(1)のようなことが指摘されてきた。

- (1) a. 見えの共有が共感、すなわち感情的な経験の共有感につながる。

(本多 2005 : 204)

- b. 日本語は映像的な言語である。そして、日本語のこの特性を生みだしているのは、話し手と聞き手による共同注視の働きである。

(熊谷 2011 : 3)

- c. 「日本語」のコミュニケーションにおいては、聞き手自身が「イマ・ココ」に制約される「場/ba/」の構成要件であるからこそ、「場」での注視は共同であるという主観が成立する。

(中野 2017 : 143)

上の (1a, b, c) と本稿の「場」における「知覚感覚体験」についての考察から、次の(2)が言えることになるとと思われる。

(2)「共有される場」での「見えの共有」は「共有される知覚感覚体験」につながる。

(日本語において「場」とは「共有される場」であり、「知覚感覚体験」とは「共有される知覚感覚体験」のことであるので、以後、「場」,「知覚感覚体験」の語を、「共有される場」,「共有される知覚感覚体験」の意味で用いるが、「共有」の意味をはっきり明示したい場合には、この語をあえて付け加えることにする。) もっとも、これまで論じてきた、「時」,「場所」,「状況」表現や、絵本、映画ポスターでの日英語比較においても、日本語話者間においては、「共有される場」での「共有される知覚感覚体験」が成り立っているのであるが、本稿では、前号で扱った以外の言語・文化現象の比較について、(2)の観点から見ていきたい。また、この(2)の一般化は、5節以降でふれられる日本文化の側面にも関わってくることは、あらかじめ指摘しておきたい。

3. 「共有される場」での「共有される感覚体験」の観点から見る「間」と「気」

剣持(1992)や有馬(2015, 2018)では日本文化との関わりを表す語として、「間」について論じられているが、以下、本節では、「間」と「気」について、「共有される場」での「共有される知覚感覚体験」という観点から見ていきたい。結論として、「間」,「気」の語を含む表現については、これらに対応する英語表現を見出すことは極めて難しいということになるだろう。

3.1. 「間」が含まれる表現

まず、剣持(1992: 83)が『「間」の日本文化』で、「生と死はひとつづきである。「間」はかくてへだてる「間」ではなくて、自然と人間との

連続の相における媒介の「間」である」とした、日本文化の特徴を表すとも言える「間」をとりあげたい。

「間」を含んだ表現としては、「世間」、「仲間」、「民間」、「期間」、「間違い」、「間に合う」等の多くの語があるが、これ以外にも、本稿での「場」と直接の関わりがある「時間」、「空間」や、さらには「人間」という語の中にも「間」の語が用いられていることは、剣持の指摘を待つまでもなく、日本文化における「間」の意味合いの重要性を示すものとしてよいと思われる。

このことを念頭に置きながら、まず、本節では、「時」が関わる表現としての「間もなく」、「つかの間」、「いつの間にか」を取り上げ、この表現を含んだ日本語と対応する英語表現を比べてみたい。これらの「間」が含まれる表現についてまずもって確認しておかなければならないことは、これらの表現はすべて、「場」があってこそその「間」であるということである。つまり、これらの「間」が含まれる表現は、あくまで、「場」でのコト的事象における「知覚感覚体験」として把握される「時間」であるということである。

3.1.1. 「間もなく」

まずは、「間もなく」について見ていきたい。

- (3) 踏絵が始まった。……まもなくいつものようにけだるい暑さがくるだろう。 (『沈黙』：182-183)

The *fumie* had begun. ... It would not be long, however, until the oppressive heat would come again. (*Silence*: 116)

- (4) 島村が歩き出すと間もなく駒子の姿は街道の人家でかくれた。 (『雪国』：167)

Komako turned into the main street and disappeared. Shimamura

started after her.

(*Snow Country*: 169)

これらの(3), (4)の日本語原文における「まもなく」には、「現場」で「感覚体験」として捉えられる「時の推移」が感じられるが、対応する英語表現に関しては、「現場」に存在する「時の推移」は全く感じられない。さらに(4)では、日本語原文と英語訳の事象の生起の順は対応するものとはなっていない。(4)の日本語原文は、あくまで「現場の視点」からの記述で、「島村が歩き出(し)」たあとに、「駒子の姿は街道の人家でかくれた」ということが生じたのであるが、英語訳では逆の語順となっていて、「間もなく」が表す「時の推移」は感じられない。

次は、英語原文に対応する日本語訳として「まもなく」が現れている例である。

- (5) After a while they arrived at a great snow castle.

(*Olle's Ski Trip*)

まもなく、ふたりはりっぱな雪のお城につきました。

(『ウツレと冬の森』)

- (6) They didn't go far before they saw the little engine.

(*Choo Choo*)

まもなく、ちいさい きかんしゃが みえてきました。

(『いたずらきかんしゃ ちゅうちゅう』)

日本語訳は、分析的な英語表現にはない、「現場」での「時の推移」が感じられるものとなっている。

ちなみに、森田(1986: 1082)では、「まもなく」について、「発話の時点ないしは話題の中の時点から見て、あることが実現するまでにあまり時間を置かないという判断のとき用いる。」としているが、この森田の

解説にある、「発話の時点ないしは話題の中の時点から見て」との捉え方からは、「時の推移」の体験的な把握の意味合いがあるように思われる。このことは、以下の、「つかの間」と「いつの間に」にも言えることである。

3.1.2. 「つかの間」, 「いつの間に」

次は、「つかの間」((7), (8))と「いつの間に」((9), (10))の例である。これらの例においても、日本語原文において感じられる「現場の時」の感覚が、対応する英語表現では感じられない。

- (7) 「だが、それも今は終わったのだ」と、徹吉はひとりごちた。

すると、喜悦に近い感情がつかの間湧きあがり、船の振動と共に快く彼の体内を駆けめぐった。 (『楡家の人びと 第一部』: 304)

“Still, that’s all over now,” Tetsukichi thought to himself, feeling an upsurge of emotion close to pure joy pulsing through his body with the throbbing of the ship. (*The House of Nire*: 208)

- (8) 敵の第一波が去ったつかのまに、上空直衛の零戦を收容した。

(『楡家の人びと 第三部』: 65)

As soon as the first wave of the enemy attack had withdrawn, the defensive cover of Zero fighters was taken back on board.

(*The House of Nire*: 563)

- (9) いつのまに寄って来たのか、駒子が島村の手を握った。島村は振り向いたが黙っていた。 (『雪国』: 170)

Komako had come up to him, he did not know when. She took his hand. He looked around at her, but said nothing.

(*Snow Country*: 171-172)

- (10) 「私にはだから、布教の意味はなくなっていた。たずさえてきた

苗はこの日本とよぶ沼地でいつの間にか根も腐っていった。……」
(『沈黙』: 236)

“And so the mission lost its meaning for me. The sapling I brought
quickly decayed to its roots in this swamp....” (Silence: 150)

(10)では、日本語原文の「いつの間にか」が‘quickly’と英訳されているが、この表現では「推移の感覚」は伝えられない。

次は、「つかの間」, 「いつの間に」が日本語訳に現れている例である。

(11) Its disappearance, however, was but momentary.
(‘The Red-Headed League’ *The Adventures of Sherlock Holmes*: 83)
けれども、その静寂はほんのつかの間で、……
(「赤髪組合」『シャーロック・ホームズの冒険』: 75)

(12) Then, with time, the squatters were no longer squatters, but owners; and their children grew up and had children on the land.
(*The Grapes of Wrath*: 231)
やがて、ときがたつと、こうした居直り居住者は、いつのまにか居直り居住者ではなくなり、りっぱな地主になった。
(『怒りの葡萄 (上)』: 453)

(11)においては、‘momentary’と日本語訳の「つかの間」は一見、対応しているようにも見える。しかし、‘momentary’の意味は、‘lasting for a very short time’ (LDCE³)という客観的な意味であって、「つかの間」のように、「間」の「基準時」が「現場」にあるわけではない。一方、(12)では、日本語訳の「いつのまにか」には英語原文にはない「推移の感覚」が表れている。

これまで、「間もなく」, 「つかの間」, 「いつの間にか」に対応する英語

表現には、「現場での時の推移の感覚」が感じられないということを見てきたが、すでに前号においても、「朝」、「夕刻」、「昨日」のような日本語表現に対して、対応する英語表現では「時」が分析的に捉えられ、「時」の感覚が表れていない例があることを指摘した¹⁾。少なくとも、「現場」での「時の推移」を把握するには、「場」でのコト的事象を「知覚感覚体験」で把握することが求められるが、そもそも、「場」のない「Figure/Ground 認知」の英語では、「時の推移」の感覚は把握しようがないということになろう。

3.1.3. 「間」についてのまとめ

これまで述べてきたことから、これらの「時」を表す「間」の用法については、次のように一般化したい。

- (13) 「間」 = 「共有される場」で、意義付けされた「時間」への「共有される知覚感覚体験」を表す。

もっとも、「間」には「時」を表す表現だけではなく、「空間」等を表す様々な用法もあり、「間」に関する「時」以外の一般的な用法については、剣持（1992）や有馬（2018）に、以下のような記述がある。

- (14) しかし、日本人の「間」の意識、「間」の感覚では「間にあう」の「間」も、「間が悪い」の「間」も時間的な意味にも空間的な意味にも使うのである。「何々要りませんか」「間にあってます」の「間」は空間的な意味であるし、「やっと間にあった」は時間的な意味である。……「間がいい」「間をとる」という使い方も、時間、空間を一つにした概念である。（剣持 1992：51-52）

- (15) このように日本語・日本文化において好まれる時間・空間的な未完

成の表現としての「沈黙」「空白」である「間」が暗示的な表現力をもっていることは、よく知られているとおりである。

(有馬 2018 : 23)

さらには、この(15)の有馬とやや重なる見解として、次のバルク(1988 : 336)を紹介しておきたい。

(16) 日本の風土性は、間隙と間、空無と沈黙を尊重して、ヨーロッパの風土性よりも場所的な次元を相対的に重視する。この傾向は、現実的なものを愛好する日本人の趣味に、論理的に繋がるものであることが分かる。

ここでの「場所的な次元」とは、本稿での「場」ときわめて近いものと解されよう。

よって、剣持、有馬、バルク等で指摘されている「空間的」な事例も含み得るものとして、「間」についての(13)を拡大し、次のような〈間〉のスキーマを提案したい。

(17) 〈間〉 = 「共有される場」で、意義付けされた「時間」・「空間」や沈黙・空白に対する「共有される知覚感覚体験」を表す。

別な言い方をするならば、「時間」, 「空間」のどちらの「間」も、「場」に潜在的に存在しているからこそ、「知覚感覚体験」で把握することが可能になるのであるとも言えよう。

3.2. 「気」が含まれる表現

本節では、前節の「間」に続き、「気」を扱うが、具体的には、「気」

で始まる、「気分」、「気配」、「気持ち」、「雰囲気」を取り上げる。「気」が用いられる語は、これら以外にも、前節での「間」のように、「景気」、「気力」、「元気」、「気品」、「病気」、「気がね」、「気休め」等の多くの語があるが、これらの「気」が用いられた表現は、「共有される場」における話し手の何らかの「共有される感覚体験」を表すとしてよいであろう。このことを念頭に置きながら、「気」で始まる日本語表現とその対応英語表現を具体的に見ていくことにする。

3.2.1. 「気分」

まずは、「気分」から見ていきたい。ちなみに、ベルグ（1985：50-51）には、「「気分」は、主体に許された「気」の「分け前」と分析できる。……主体に与えられるその「分け前」は他人との関係に依存するから、主体といえども同じ関係の中でしかこの分け前を決定しえない。つまり、この関係の中でしか、自分自身になりえないのである。」という記述があるが、「気分」が「他人との関係」において論じられていることが興味を引く²⁾。まずは、日本語原文の例である。

(18) 「どうだね、安田を少しほじくってみるか？」

笠井主任は、顔を突き出した。何か気分が乗ってきたときにする、彼の癖であった。（『点と線』：125）

“How about investigating Yasuda for a bit?” Kasai thrust his head forward. This was a characteristic gesture when he was especially alert. (*Points and Lines*: 78)

(19) 貴子は、その報告を聞いた途端に、暗澹たる気分にさせられた。

（『凍える牙』：246）

Hearing this plunged Takako into gloom. (*The Hunter*: 131)

(18), (19)の「気分」が表す「体験的な感覚」は、対応する英語表現では全く表されていない。

次は日本語訳に現れた「気分」である。

(20) Two days the families were in flight, ...

(*The Grapes of Wrath*: 163)

二日のあいだ、家族たちは追われる気分ですごした。

(『怒りの葡萄 (上)』: 319)

この例では、‘flight’ という心的ニュアンスが全くない抽象名詞での表現が、「追われる気分」という感覚的な表現で訳出されていることが注目される。

3.2.2. 「気配」

次は、「気配」である。「気配」の意味は「はっきりとは見えないが、漠然と感じられるようす」で、「気 (け) + 這 (は) うの名詞形」(weblio)とされるが、まさに、「分析的把握」では捉えられない、「場」での「体験的把握」でしか捉えられない意味である。

まずは、日本語原文と英語の対応表現を見ていこう。

(21) 背後でお嬢さんの動く気配がする。 (『凍える牙』: 400)

Behind him, Takizawa could sense Otomichi's nervousness.

(*The Hunter*: 211)

(22) 「パードレ、眠っとなつてですか」

私は返事をせず、うす眼をあけてキチジローの気配を窺っていました。

(『沈黙』: 114)

“Father, are you awake?”

I made no answer, but from half-opened eyes I looked at my companion. (Silence: 74)

(21)の英訳の‘nervousness’は抽象名詞には「気配」に相当する意味合いが全くないわけではないが、(22)の英訳では、対応する英語表現に「気配」のもつ「感覚体験的」な意味合いが全くないことが注目される。

次は、日本語訳に「気配」が表れた例である。

(23) About midnight Joe awoke, and called the boys. There was a brooding oppressiveness in the air that seemed to bode something. (The Adventures of Tom Sawyer: 116)

真夜中ごろ、ジョーは目をさまして他の二人を呼び起した。空気のなかに、何事かを予告するような、重苦しい気配がただよっていた。(『トム・ソーヤーの冒険』：161)

ここでも、(23)の日本語訳の「重苦しい気配」に相当する英語原文が、oppressiveness という分析的・抽象的な意味合いの抽象名詞であることが注目される。

3.2.3. 「気持ち」

次は「気持ち」であるが、森田（1986：429）は、「特に物事に接して感じる心の状態である。したがって、心にある状態を与える対象か場面が条件として存在する。」と述べている。「心にある状態を与える対象か場面が条件として存在する」との記述は興味深いが、これは、「気持ち」は「場」に生じているものとも解されよう。

まずは、日本語原文の例である。

- (24) 三原がそう言うと、主任もうなずいた。彼も同じ気持に違いなかった。
(『点と線』: 100)

When he spoke his mind the inspector merely nodded. He seemed to agree.
(*Points and Lines*: 64)

- (25) だが、この小樽駅から乗ったのではあるまいか、という着想は、三原の気持に何か前進を起させた。
(『点と線』: 185)

But the thought that Yasuda might have gotten on at Otaru made Mihara pursue it further.
(*Points and Lines*: 116)

(25)では、「三原の気持」に相当する英語が、単に Mihara になっていることが注目される。

次は、日本語訳に現れた「気持ち」である。

- (26) Alex murmured uneasy agreement. (*The Moneychangers*: 141)
アレックスは不安な気持で同意を示した。

(『マネーチェンジャーズ (上)』: 208)

ここでは、英語原文の *uneasy agreement* の抽象的な表現が、「不安な気持ち」と訳出されているのが注目される。

3.2.4. 「雰囲気」

最後は、「雰囲気」の例である。この語の意味は「その場やそこにいる人たちが自然に作り出している気分。また、ある人が周囲に感じさせる特別な気分。ムード。」(weblio) とされるが、「場の雰囲気がいい」という用法にあるように、先の「気持ち」と同じく、「場」と密接なつながりのある語である。

次は、日本語原文の例である。

- (27) 何よりも舞い姿の美しさは群を抜いていた。単調な舞であるはずなのに、それを感じさせない独特の雰囲気があった。

(『戸隠伝説殺人事件』：39-40)

She had been far more graceful and beautiful than any of the other dancers. The dance was usually monotonous, but it never seemed so when she was performing it.

(*The Togakushi Legend Murders*: 36)

- (28) その工場の雰囲気が千代子は好きであった。いくら見ても飽きなかった。

(『楡家の人々 第二部』：157)

Chiyoko loved the factory and never grew tired of watching what was going on.

(*The House of Nire*: 353)

(27)では「雰囲気」に相当する英語表現はなく、(28)では「工場の雰囲気」が単に、“the factory”ときわめて単純に英訳されていることが注目される。

次は英語原文の例である。

- (29) The meeting was breaking up. In contrast to the earlier accord, there was a sense of constraint and awkwardness. (*Hotel*: 369)

会談は、途中までの和気あいあいたる雰囲気が一変して、気まずい空気の中で終った。

(『ホテル (下)』：262)

(29)での英語原文の the earlier accord は、「雰囲気」に相当する「心的」な意味を持ち得ていない。

3.2.5. 「気」についてのまとめ

これまで見てきた、「気」が含まれる「気分」、「気配」、「気持ち」、「雰

「場」からは、主人公の心的状態のみならず、主人公をとりまく「場」の「空気・雰囲気」までもが伝わってくる。しかし、対応する英語表現からは、そのような「場」の雰囲気は全く伝わってこない。

ちなみに、木村（1972）、芳賀（2004）には、「気」について以下の記述がある。

(30) これらの言葉（「気楽」「気苦労」「気の毒」「気疲れ」「気がもめる」「気をくばる」……等）に表現されている「気」は、大部分自分以外の相手との関連において見られており、さらにその多くは、自分自身の「気分」が、相手側の事情のみによって動かされている様子を示している……つまり気は一応は自分のものとして言われているが、自分の自由にならぬもの、周囲の情勢次第でいろいろに変化するもの、その意味で「人と人との間」にあるものということが出来る。
（木村 1972：168-169）（下線筆者）

(31) 日本人は、自然を把握するのに好んで気という語を用いてきた。これは注目すべき事実です。天気、気象、気候、気配・天地正大ノ気……など、人間を取り巻く不定形のものが日本人の見る自然環境だったのです。その上、元気・気ニナル・気が弱イ・気ヲツカウ・気ガスマナイ・気ガハレル……など、心理状況まで「気」で表現するところにも、自然と人間の連続、無境界の把握が感じられます。
（芳賀 2004：57）（下線原文のまま）

ここでの「気」についての、木村の「相手との関連において見られる」、「人と人との間にあるもの」、芳賀の「自然と人間の連続、無境界の把握」等の見解は、先のベルクの「その「分け前」は他人との関係に依存する」との見解も含めて、これまで論じてきた本稿での観点からは、言ってみれば、「気」は「場に存在する空気」を、話し手が「感覚体験」として把

握したものと言うことができるであろうか。また、「気」については、森田（1986：367）に「意識に現れる反応の在り方や傾向」、山本（2021：99）に「心身の非分離、自己と対象との非分離に「気」が流れている」との記述がある。

これらのことを考慮に入れ、先の(13)の「間」の一般化にならって、「気」について一般化すると、次のようになると思われる。

(32) 「気」＝「共有される場」での、「周囲の空気・雰囲気」に対する「共有される感覚体験」を表す。

「気」が、「場」での「感覚体験」によって把握されるとすれば、先の「間」におけるように、英語の「Figure/Ground 認知」では把握できないということになろう。「間」であれ、「気」であれ、これらが、「共有される場」での、「共有される感覚体験」を表す点においては、共通しているということである。

3.3. 日本語表現と英語表現の根源的な違い

これまで、「間」, 「気」を含む語について本稿で論じてきた見解、すなわち、「日本語は、「共有される場」での「共有される感覚体験」を表す」との見解は、大なり小なり、実は、すべての日本語に当てはまることであり、ここに英語表現との根源的な違いがあると考えられる。

例えば、次の『こころ』の日本語原文と英訳を比べてみたい。

(33) 大通りから二丁も深く折れ込んだ小路は存外静かであった。家の中はいつものとおりひっそりしていた。 (『こころ』：39)

The house was some distance from the main road, and we seemed to be surrounded by a complete calm. All was quiet, as usual, inside

the house itself.

(*Kokoro*: 29, (tr.) by McClellan)

この(33)の日本語原文には、「間」,「気」を含む語は用いられていないが、何かしら、「場に存在する空気・雰囲気」が伝わってくるのに対し、対応英語表現からは、そのような「空気・雰囲気」は全く感じとることができない。この理由として「折れ込む」に対応英語表現はないとか、「大通り」と‘main road’,「ひっそり」と‘quiet’,「家」と‘house’は同じ意味ではない等のことが指摘されるかもしれないが、事実はそのような表面的なことでは全くない。それよりは、ここでの違いとしては、日本語原文に、知覚主体となる「私」等の表現は現われていないのに対し、英語訳には‘we’が現われているということがあげられよう。一般的に、日本語の英訳において、失われるものは「場」の「空気・雰囲気」であると言われるが、(33)での日英語の大きな違いとしては、日本語表現はすべて、「場」での「今、ここ」での事象に対する「知覚感覚的」な把握によるものであるので、「場」の「空気・雰囲気」の感覚が伝わってくるのに対し、英語表現はすべて、メタ認知の「Figure/Ground 認知」による把握であるため、「概念的な意味」しか持ち得ていないということがあげられる。つまり、「共有される場」での「共有される感覚体験」のある言語とない言語の違いによるものなのであり、そもそも、「場」での「知覚感覚体験」においては、「場」に存在する何らかの「空気・雰囲気」は、必然的にその把握対象として含まれることになるのである³⁾。

もう一つ、次の例文を追加しておきたい。

(34) 町は寒い風の吹くにまかせて、どこをみてもこれというほどの正月めいた景気はなかった。 (『こころ』: 62)

I detected little of the New Year spirit as I walked about the cold, windy streets. (*Kokoro*: 51, (tr.) by McClellan)

ここでの大きな違いは、日本語原文の「町」は、「場」の設定を表すコト的な「場所」の表現となっているが、英訳では‘streets’というモノ的な表現になり、「場」の感覚がなくなっているということである。「景気」については、上で論じた「気」が含まれる語であるが、本稿での「「場に存在する空気」を、話し手が「感覚体験」として把握したもの」との見解はこの語にも当てはまる。また、「寒い風の吹くにまかせて」や「これというほどの正月めいた景気」という表現の認識主体による「知覚感覚体験」による「感覚性」は、対応する英語表現には感じられない。また、日本語の「体験的把握」では、「認識の原点」となる認識主体は現れていないが、英語訳では、客体化された認識主体の‘I’が2回現れているのも大きな違いである。そもそも、物語が語り手の「発話のイマ」の「知覚感覚体験」によって述べられるとすれば、物語には「語りの場」での語り手の「感覚体験」、すなわち、「臨場感」が必然的に表れることになる。(33), (34)の例は言うに及ばず、すべての日本文において、「どうしても日本語の文は話し手(語り手・書き手)の声を消すことができない」(荒木 1990 : 77)⁴⁾のはそのためである。

ちなみに剣持(1992 : 12-13)には以下の記述がある。

- (35) 西欧語が、前置詞や関係代名詞の機能によって、単語の概念と概念、イメージとイメージの関係を組みたててゆくのに対して、日本語は「間」を介してイメージとイメージを並べ、ひとつの言語空間をつくる。「春雨じゃ」と「春雨」を詠嘆する言葉と、「濡れていこう」という自己の主体的意志を表明することばとのあいだに、ことばにあらわされない情緒的空間—すなわち「間」が存在する。……日本語は「ことば」にあらわさないことばを持つ言語である。感覚空間、感情空間、情緒空間ですっぱりことばを包み込む構造の言語なのである⁵⁾。

いみじくも、ここで述べられている、「感覚空間、感情空間、情緒空間」は何によって創られるのかと言えば、剣持では「間」によってということになる。ではさらに、この「間」とはどのような性質のものなのかとさらに問えば、それは、(17)で提示された「〈間〉のスキーマ」のようなものであると思われる。一方、「場」のない「Figure/Ground 認知」では、「共有の場」での「間」がないため、「感覚空間、感情空間、情緒空間」は存在しないということになる。

4. その他の言語現象

4.1. 手紙の書き方

まずは、手紙についてである。尾野 (2018 : 136) の注 15 では、日米の手紙の書き方の違いについて次のように論じた。

(36) 「情報のみ」の伝達か、それとも、「感覚体験」の伝達かにやや関連があるかもしれないと思われる現象に、「日本人の書く手紙には、天候のあいさつから始める枕詞があるのに対して、アメリカ人の書く手紙は、枕らしきものが全然なく、のつけから本題に入る」(牧野 1978 : 108) という日本語と英語の手紙のスタイルの違いもあげられるかもしれない。……まず、アメリカ人の書く手紙は、本題そのものだけが述べられるということであるが、これは、……「手紙の本題」そのものが、周囲の場の雰囲気からは独立したものとして「モノ」扱いされるため、これは、情報の「モノ的伝達」と言える。一方、日本人が手紙を書く際には、……「手紙の本題」という「モノ」は、あくまで、「手紙の本題」の執筆の際の「場」というコト的雰囲気の中に存在するのであり、……よって、天候のあいさつ等が加わった日本人の手紙は、伝えたい情報の「コト的伝達」と言えるかもしれない。

確かに、日本人の書く手紙とアメリカ人の書く手紙の違いについては、上で述べられた「コト的伝達」・「モノ的伝達」が当てはまると言える⁶⁾。ただ、本稿での「場の枠」の設定という観点からあえて付け加えることがあるとすれば、「晩夏の候」や「秋風が心地よい時節となりました」といった「時候の挨拶」は、いわば、手紙の執筆という「場」での「時」の「状況設定」による「共感の構築」の働きをしていると考えられるのではないかということである。

もちろん、日本人の手紙でもすぐ本題に入るビジネスライクの英語的なスタイルの手紙もあるとは思われるが、しかし、そのような手紙は、お互いの「共感の構築」が十分ではないまま、「思い」が何か相手に伝わらないままに終わってしまうようにも思われる。一方、「場」のない英語では、「場」の状況設定も「共感」の構築も不用であるということになるう。

4.2. エッセイにおけるパラグラフの構成

パラグラフの構成については、日本語と英語で異なることが指摘されている。次の例はよく引き合いに出される「煙の行方」というエッセイであるが、さて、日本語原文は (37a) と (37b) のどちらであろうか⁷⁾。

(37) a. 20代から60代くらいまでの男女10人ほど集まる会合に出席した折のことである。ふと気がつくと、その中で煙草をくゆらしているのはぼく1人だった。

その少し後、劇作家の人々3人と話す座談会があった。そこでも、他の出席者は誰も煙草を吸わなかった。うち2人は前にはかなりのヘビー・スモーカーであったのに、健康上の理由で禁煙したとのことだった。我が家を訪れる客の中にも、最近は煙草を吸わない人がかなり多くなっている。

(加藤・ハーディ 1992 : 38)

- b. 煙草の煙は巷から消えつつある。最近の会合に出席した折のことであるが、火をつけようとしてふと気がつくと、その中で煙草を吸う人間はぼく一人だった。20代から60代までの喫煙年齢に達した男女の大人10人の会合だったが、誰も吸わなかった。その少し後、劇作家の人々3人と話す座談会があった。そこでも、他の出席者は誰も煙草を吸わなかった。我が家を訪れる客の中にも、最近は煙草を吸わない人がかなり多くなっている。

(加藤・ハーディ 1992 : 66)

日本語原文は(37a)で、(37b)は英語らしいパラグラフの構成に書き直して、それを日本語訳したものである。(37a)のような構成での英文が英語話者にわかりづらいのは、「英語のパラグラフでは当然あるべき、全体で何が言いたいかをきちんと言語化した文すなわちトピックセンテンス (topic sentence) がないことにある」(樋口 2004 : 133) ためとされる。一方、文頭にトピックセンテンスのある(37b)のパラグラフ構成は英米人にはなじみがあるものであり、文頭の「煙草の煙は巷から消えつつある」は、「Figure/Ground 認知」の Figure とも言えるもので、Figure を最初に述べるということは、結果志向的なパラグラフ構成であると言える。

これに対し、(37a)のパラグラフ構成が日本人になじみがあるのは、すでに前号の「日本語の「時」, 「場所」, 「状況」の表現と対応する英語表現」で論じたように、日本語の文章では最初に「場の枠」を設定することが好まれ、この「場の枠」の設定に相当するのが、「…会合に出席した折のことである」という冒頭の文であるということである。この「共有される「場の枠」の設定をすることによって、読者は話の「場」の中に入っていきやすくなると言えよう。「起承転結」の「起」で始まる文の

流れが日本人に好まれるのは、「起」がいわば、前号で論じた「時」,「場所」,「状況」表現で始まる「場の枠」の設定の役割をしているためと考えられる⁸⁾。

あえてここでのパラグラフ構成に関連することとして付け加えておくと、英語の結果志向は、アメリカでの歴史の教え方にも関わっていると思われる。ニスベット (2004: 145-146) には、日本の教師は一連の出来事に関して文脈を丁寧に設定することから始めるのに対し、アメリカの教師は出来事を年代順に紹介するのではなく、例えば、オスマントルコ帝国が滅びた主要な原因は三つある、といったような歴史の出来事の原因に沿って話が進められる、との記述がある。このことについても、「場」のある日本語と日本文化においては、歴史の流れを「体験的」に年代順に教えることが好まれるが、「場」のない英語と英米文化においては、歴史を「分析的」に捉えることになり、「結果志向」的に、歴史の出来事を因果関係として捉えることが好まれるということになろう。

履歴書の構成の違いもパラグラフの構成と関連があると思われる。日本では古い事柄から書いていくが、アメリカでは新しい順に書く (熊山 1991: 111)。「履歴書」を古い順で書いていくということは、「時の流れ」という「場」での時の流れに沿ったものと言える。しかし、新しい順で書くということは、一番重要な Figure に焦点を当てるということであり、いわば、結果志向とも言えるもので、これは、上で述べた英語のパラグラフの構成と重なるものである。

4.3. ドコとトコロ

熊谷 (2011: 22-24) には、日本語の「その犬の名前は何ていうの?」に対する英語は “What do you call your dog?”, 「こちらには～はありますか?」に対する英語は “Do you have~?” と言うように、日本語では「その」の指示詞や、「ありますか」の存在表現を用いるのに対し、英語

では ‘your’, ‘have’ の所有表現を用いるのは、「日本語は場に重きを置き、英語は所有に重きを置く」ためとしている。確かに、「場の日本語と所有の英語」という一般化は成り立つとは思われるが、本稿の観点からは、日本語で「場所」の表現が用いられるのは、「場」においては、「場所」が潜在的に存在しているので「場所」の表現が現れやすく、一方、潜在的な「場所」が存在しない「場」がない英語では、まず、「Figure/Ground 認知」によってまずモノに焦点が置かれるため、モノとモノとの関連づけが求められることになり、それが「所有」によって行われるということになろう。逆に言えば、モノとモノとの「所有」による関連付けは、英語に「場」がないことの表れとも考えられる。

よく引き合いに出される、「この部屋には窓が二つある」と ‘This room has two windows.’ についても、「場」のある日本語では、まず、「この部屋には」と「場所」が現れるが、「場」のない「英語」では、‘This room’ もモノとして扱われ、やはりモノ扱いされる ‘two windows’ とが「所有」によって関連づけられているということになる。(日本語が「場」に「場所」を見出しやすいことについては、前号の尾野(2022:33-38)の例(37)～(43)の画像と対応する日英語表現を参照されたい。)

また、池上(2000:226-227)では次の日本語と英語が対比されている。

- (38) a. *What is the capital of Japan?*
 b. 日本ノ首都ハトコデスカ。
- (39) a. *What is the next station?*
 b. 次ノ駅ハトコデスカ。

池上ではこの対比を「〈モノ〉としての概念化と〈トコロ〉としての概念化の相対性」の観点から論じ、「〈首都〉と〈駅〉が英語では〈モノ〉として、日本語では〈トコロ〉として捉えられているという対立が生じて

いる」(池上(2000:227))としている。ただ、この違いについても、「時空間」の「場」のある日本語においては、「場所」が潜在的に存在するところから、ドコという表現は現われやすいが、「時空間」のない「場」がない英語においては、「場所」は潜在的に存在するものではないので、「Figure/Ground 認知」によって、〈首都〉と〈駅〉は、モノとして捉えやすくなっているとは言えそうである。

また、同じく、池上(2000:223)が指摘する、‘come to me’ と「私ノトコロニ来る」(*「私ニ来ル」)の比較についても、やはり、「場」の言語である日本語の「場所」表現の優位性が関わっているように思われる。

また、金谷(2019:299)には、日英の人名比較について、「ひとことでは、日本人の苗字は場所、つまり、「祖先はどこに住んでいたか」に注目しますが、アメリカ人は「祖先はどんな人だったか」が大切だということです。つまり苗字に関しては「場所の日本語」、「人の英語」と言えます。やはり、ここでも、人がでてこないのが日本語なのです。」との記述があるが、苗字の命名にも、「場」のある日本語と、「場」のない英語の違いの反映をみることは可能である。「場」のある言語であれば、「場の枠」の基本設定としての「場所」がもっとも身近なものとして苗字の命名に用いられるが、「場」のない言語であれば、「場所」が基本構文の設定の枠組みとしては存在していないため、モノである Figure としての人に焦点がいくことは十分考えられることであると言えるかもしれない。

5. 「共有される場」での「共有される感覚体験」の表れとしての文化現象

5.1. スポーツにおける日本と欧米の比較

本稿での言語的観点からの「場の(枠の)設定」は、日本人の様々な

行動様式にも当てはまるのではないと思われる。まずは、日本とイギリスのテニススクールでの違いについて述べた小笠原（2006）の次の(40)、(41)の引用を見てみよう。

- (40) 海外との違いといえば、小学生の娘がイギリスにおり、テニスを習っていたのだが、これが日本と違ってまた面白い。コーチの女性は元プロのテニスプレーヤーである。日本であれば、まず素振りや「型」の基礎をつけてなどと考えるところ、「型」などお構いなしに、とりあえずラケットを握らせ、ボールを打たせるのである。そのうち、自分に合った形を見つけるからという考えらしい。

（小笠原 2006：71）

- (41) 子供が通うイギリスのテニススクールでは、生徒の子供たちが三々五々集まり、時間になると何やらレッスンが勝手に始まるのだが、これが日本人のテニススクールでは、そうはいかない。まず、時間になったら、整列させる。一堂に会することが重要なのである。つまり、まず、第一に入り口を合わせて文脈設定の境界をセットするのである。私は、日本人が礼儀正しいから、なんでも整列させるのだとは思っていない。重要なのは境界の明示化なのである。
.....

この境界設定志向が、日本人の基本的な思考形態をかなりユニークなものにしている。つまり、まず境界の設定を行ない、そこから内側に向かって考えていく傾向が非常に強いのである⁹⁾。

（小笠原 2006：95-96）

更に、小笠原は「場を外す」、「場をしのぐ」といった用法をとりあげ、「日本人は「場」という概念（ある基準で境界を定義された集団に時間的観念を入れたもの）をよく使う。その「場」において文脈が形成される。

この文脈は「場」ごとに形成されるが、「場」と「場」の文脈に一貫性は必要とされない」（小笠原 2006：32）としている。(41)での、「この境界設定志向が、日本人の基本的な思考形態をかなりユニークなものにしている」との見解は傾聴に値すると思われる。

(40), (41)は日本人による日英のテニスのやり方の違いについての観察であるが、次の(42)は英国人による日英のテニスのやり方の違いについての観察である。

(42) ...So I put on my rather old and scruffy tennis shorts, a tee-shirt and some tennis shoes and went along on Sunday. The first thing that I noticed was that all of the members of the tennis circle were dressed in the very smartest and very best tennis clothes and carried splendid tennis rackets.... The next thing that surprised me was that when we reached the tennis courts everybody formed a large circle and began doing warming-up exercises...

(Pinnington 1986: 19)

(42)では、(40), (41)では述べられていないこととして、テニスをする全員が高価なテニス用の服、靴、ラケットを身に着け、テニスをする前に全員がウォーミングアップをすること等を指摘しているが、このようなことは日本人の感覚としては全くもって当然過ぎることでもあり、それ故、これらのことについてあえて(40), (41)では言及されなかったとも考えられる。

もちろん、スポーツにおけるこのような日英の違いはテニスにおいてのみ生じるのではなく、他のスポーツにおいても起こりうる。ランバート（1965：175-176）は、日本人のゴルフについて、次のように述べている¹⁰⁾。

- (43) トーナメントに出るアメリカのプロ選手よりもすばらしいゴルフ服を着て、クラブハウスにはいる日本のゴルファーを見た時、わたしは彼らを皆プロであろうと思った。しかし、いったんゴルフを始めたところをみると、完全な初心者もいる。……ゴルフ用具の品質はそんなに重要でもないし、ゴルフ用の服がなくてもうまくやれる。米国では楽しみでやる人の中に、特別に道具を持っていないことをじまんにする者もいる。

このランバートの見解も、日本では、服装やフォームにおいて、ゴルフの「場」に従うが、欧米ではゴルフの「場」がない、という点で、先のテニスについての小笠原の指摘と重なってこよう。

上で述べたテニスやゴルフは趣味としてのスポーツであったが、プロスポーツにおいても、同じことが成り立つようである。次は、R.ホワイティングの『菊とバット』（2005：68-69）からの引用である。

- (44) アメリカのバッターは、打席に立ったらフォームやスタイルにはまったくこだわらずにバットを振る。投手もフォームにはまったく無頓着だ。……アメリカのコーチなら、「フォームは単なるみかけの問題で、大切なのは結果だ」と言うだろう。

日本ではそうではない。既成のやり方が絶対なのだ。……野球武士道の教えによると、野球の“達人”は、柔道や空手、剣道の高段者のように、最良の戦術を心得ている。……投手の投げ方も決まっている——一定のモーションで落ち着いて投げろ。……

これほど形にこだわるのは、日本人の心の中に「フォームこそ確かなもの」という信念があるからだ。……

以上、スポーツにおける日本的な例として3種類のスポーツをあげた

が、どれもうなずけるものばかりである。この中できわめて日本的と思われる例は、皆が一斉に集合し、同じような服装やフォームであるという(40), (41), (42)のテニスの事例である。まず、「一斉に集合する」ということについては、テニスの開始という「場」での「境界設定志向」が関わり、「皆が同じような服装やフォームである」ということについては、先に(2)で述べた、「共有される場」での「共有される感覚体験」が関わっていると思われる。そもそも、「日本人が服を選ぶときの基準の一つに、自分の服装がどのように他人に見えるかということがあると言われている」(尾野 2018: 141) が、全員がテニスをするという「共有される場」であれば、「場」で共有される「空気・雰囲気」が「知覚感覚体験」されることによって、各人が周囲の人の服装を意識し、全員がテニスウェアを着るようになるということは至極当然のこととなろう。一方、欧米人の「Figure/Ground 認知」であれば、そもそも、テニスという「場」も存在せず、よって、「場」に存在する「空気・雰囲気」もないため、各人が「周囲の空気・雰囲気」に影響されることもなく、思い思いの服装ややり方でテニスをすることになると思われる。結局、プロスポーツにおいても、(44)で述べられているような日本の特徴については、「共有される場」での「共有される知覚感覚体験」が、個人主体の欧米的な特徴については、モノに焦点を置く分析的な「Figure/Ground 認知」が、それぞれ関わっているということになると思われる。

これらのスポーツにおける日本的な特徴の要因の一つが、日本語の事態把握である、「共有される場」での「共有される感覚体験」にあるとすれば、これらの特徴は、スポーツ界だけに特有の現象なのではなく、同じく「場」での「感覚体験」が関わり得る、前号で論じた、小説や絵本、映画ポスターにおける日英語の違いとも重なり合うことが予想されることになる。すなわち、日本では、テニスをする人が一斉に集合することに始まり、周囲の人の服装やフォーム等の雰囲気の影響を受けやすいと

いうことは、小説において「時」,「場所」,「状況」等の「場の枠」を設定する表現から始まることが多く、また、絵本において、「場の枠」の設定を表す、画像の背景的な「場所」,「背景」が把握対象となり言語表現されやすいこと、映画ポスターでは、人物よりも「背景画像」が重要視され、タイトルは全体の雰囲気伝えるものになりがちであるということに重なり、一方、欧米では、テニスをする人が一斉に集合するといったことがなく、他人の服装やフォーム等に影響されにくいということは、小説においては「時」,「場所」,「状況」といった「場の枠」の設定表現がなく、また絵本においては、画像の背景的な「場所」,「背景」が把握の対象とはならずよって言語表現されにくいこと、映画ポスターでは「背景画像」がなく人物に焦点が当てられやすいこと、タイトルは全体の雰囲気を伝えない場合があること等々に、重なり合う現象であると考えられる。そもそも、「周囲の空気・雰囲気」の影響を受けるか否かの日米の文化の違いは、前号の最初で述べた「笑顔の度合い」についての日本人とアメリカ人の判断の違いに直結するものでもあった。すなわち、「周囲の空気」というものは、「論理分析」の対象としてではなく、あくまで、「感覚体験」の対象としてしか把握できないものなのである。つまり、これは先の3.3節でも述べたことだが、「場」での感覚体験ということであれば、なにかしら「周囲の空気・雰囲気」が把握対象とならざるを得ないのである。

ところで、前号(尾野 2022: 51)では、小説・絵本・映画ポスター等を、「場」,「モノ」,「コト」,「知覚体験的把握」,「分析的把握 (Figure/Ground 認知)」の観点から分析し、次のように一般化した。

- (45) 「場」に依存する認識である「知覚体験的把握」においては、「モノ」を「場」から独立した「モノ」としては把握できず、「場」に存在する「コト」の一部としてしか把握しえないが、「場」から独立し

た認識である「分析的把握（Figure/Ground 認知）」においては、「モノ」を「モノ」として把握しうる。

結局のところ、この(45)の一般化は、日本と欧米のスポーツについての違いについても当てはまると思われる。つまり、日本語話者の「知覚感覚体験」においては、選手というモノは「場」でのスポーツというコトの一部であるので、スポーツという「場」の「空気・雰囲気」に依存することになり、その影響を受けざるを得ないことになるが、英語話者の「Figure/Ground 認知」においては、選手というモノはスポーツというコトからは独立したものであるので、日本におけるような「場」の「空気・雰囲気」に影響を受けることなく、選手独自の判断で行動することができるということになる。

さらに付け加えるならば、日本ではプロスポーツであれ、アマスポーツであれ、一定の型・フォームが求められるのに対して、欧米においては、このようなことは求められず、特に、プロスポーツにおいては結果がすべてであるということについても、「知覚感覚体験」かそれとも「Figure/Ground 認知」かの観点から、説明することは十分可能であると思われる。まず、日本のスポーツでの一定の型・フォームを、結果に対するプロセス重視として捉えることは可能であると思われる。であれば、スポーツにおける日本での型・フォームにこだわるプロセス重視、欧米での型・フォームにこだわらない結果重視は、尾野（2018）で論じた、日本語表現のプロセス志向、英語表現の結果志向に、それぞれつながることになり、一見奇妙とも思える「言語表現とスポーツの相同性」を見てとることができる。ちなみに、このような言語表現のプロセス志向・結果志向は、すでに、4.1 節で論じた「手紙の書き方」、4.2 節で論じた「パラグラフの構成」、「歴史の教え方」、「履歴書の構成」等にも通じるものであることは言うまでもない。

5.2. 日常生活様式・行動様式における日英比較

これまで述べてきた、スポーツにおける日本人の「共有される場」での「共有される知覚感覚体験」による特徴は、スポーツにおいてのみならず、日常生活での様々な生活様式・行動様式にも表れていることは想像に難くない。

日本と欧米の生活様式の違いとしてよく指摘される事例として、先にあげた、テニスでの一様なテニスウェアの着用と同じような現象として、日本での学校や会社での制服がまずあげられることに異論はないと思われるが、このことも「場」のある日本社会と「場」のない欧米社会の違いによるものとしてよいであろう。服装に関連して言えば、日本の大学生が一様に着用する就職活動におけるリクルートスーツや、小学生全員が一様に背負うランドセルにも、「場」の雰囲気が関わっているように思われる。

次に、きわめて日本的な行動様式の事例として、尾野（2018）でも引用した次の荒木（1985：139-140）の例を見てみよう。

(46) 学校の授業の場面もそうである。日本の学校では授業の始まりと終わりの部分で起立、礼、着席などがあって独特の区切りがつけられる。一般にこの行動のパターンは、日本の礼節として説明されているのであるが、私は、これは日本の礼節にプラスして、日本人に独自の「こと」に当たったの訣別、導入の意味をもになわされていると考える。

卒業の式典も「一同、起立、礼」で始まる。……この「一同、起立、礼」にも、「こと」に当たったの訣別、導入の気持ちが強く働いているように思われる。「一同、起立、礼」によって式典は始まり、そして「一同、起立、礼」によって式典は終わりを迎えるのである。

この荒木の指摘も、前号で論じた小説・絵本での「時」、「場所」、「状況」表現や、テニスを始める前の一斉の整列等が「場」の境界設定に関わっていたように、「卒業式」等での、開始、終了の合図の「一同、起立、礼」についても、「卒業式」という「場」での「境界設定志向」が関わっているように思われる。また、当然のこととして、「卒業式」という「場」に存在する「空気・雰囲気」に対する「共有される感覚体験」があつてこそ、終了の合図としての「一同、起立、礼」が生きてくると言えよう¹¹⁾。次も、荒木（1985：138-139）からの引用である。

(47) 列車内のアナウンスに当たってまず、「ピンポンパン」というチャイムを入れ、アナウンスが終わるとまた同じような「ピンポンパン」が入るのも同様の日本人の行動様式によっている。……

NHK がニュースの前に流す時計の針の動く場面や、番組に先がけて流される導入部分、あるいは番組の終わりに挿入される終章の場面なども、「こと」に当たったの日本人の特別な態度を見事に投影しているといえるのである。……

こういった番組の組み立て方はおそらく日本独自のものである。欧米の場合、……ニュースにしろ、他の番組にしろ、日本に見られるような、序章、終章の場面はまず見ることができない。番組はぶっくら棒に、ドライに始まり、終わり、そして次のものへと移ってゆく。

ここでの内容は年代的にはいささか古いものとは言えるが、本質的なところではまだもって変わっていないと考えられる。ここで述べられている欧米の事例は、先に述べた各自が独自の服装やフォームで、バラバラにやり始めるイギリスでのテニスの仕方に通じるところがあると言える。つまり、言語に「場」がないとすれば、「場」の事象の「始まり」と

「終わり」の境界設定もなく、よって、「場」から次の「場」への移行の「儀式」もないことになり、ある番組から次の番組への移行が単に機械的に扱われることになろう。欧米においては、「番組はぶっさら棒に、ドライに始まり、終わり、そして次のものへと移ってゆく」のはそのためと思われる。これは、いわば、「場」がなく、よって、モノだけで成り立っている「境界設定」のない世界から、同じくモノだけで成り立っている「境界設定」のない世界に移行していくようなものとも考えられよう。

有馬（2015：28-29）には、日本文化の特徴について、次のような言及がある。

- (48) しかし伝統的な日本文化の「間のリズム」はあらゆる日常生活の根底に浸透していて、それを否定することは難しい。日本国内の企業において定時きっかりの退社が難しく、「協調性」「気配り」「お付き合い」「空気を読む」感覚が重視されるのも、このような「間のリズム」と関係しているに違いない。これがプラスに転ずると、「よきチームワーク」という名で呼ばれるようになる。

（有馬 2015：28-29）

さらにまた、有馬（2015：114）では、日本語とその言語文化は、英語とその言語文化に比べ、オノマトペという感性的な類像記号による表現が発達していること、自然への志向性が高いこと、表現の明示性が低いこと、またリズムについては「人工的な時計リズム」ではなく「間のリズム」であること等を指摘し、以下のように、結論づけている。

- (49) 意味の無標である「自然」という根源的コンテクストを含めて、場や人や文脈というコンテクストに強く依存する傾向が言語文化の特徴となっている。

これらの指摘は、どれも、もっともなものであるが、特に(48)の「定時きっかりの退社が難し(い)」というきわめて日本的と思われるこの現象を「間のリズム」と関係づけた指摘は興味深い。ただ、この「間のリズム」も含め、有馬は日本の言語文化の特徴を、(49)のような「コンテキスト依存性の高さ」に求めているが、そもそも、「コンテキストに依存する」とは「場に依存する」ということでもあり、さらに、「場に依存する」とは、モノをコト的事象の一部として捉える認識のことである。であるとするれば、「間のリズム」も、「知覚感覚体験」においては、「モノ」を「場」に存在する「コト」の一部として把握するという(45)の一般化が関わっているということになると思われる。前号でふれた、「映画ポスター」の日本と欧米の違いも、映画という「場」への依存性の高さの違いによるということになろう。モノとして独立しているのが欧米の映画ポスターであり、モノがコトの一部として捉えられるのが日本版映画ポスターなのである。

もちろん、(48)、(49)のような有馬の言説は、有馬のみならず、次の(50)、(51)のような、他の様々な引用にも見出されるものである。

(50) ……人の属する共同体にも、一種の水、つまりその集団特有の気風や雰囲気がある。それは、昔なら、その家固有の祖霊やその村固有の氏神によって作り出される、外の者とは分かち合えない特別な雰囲気のことであり、今日では家風とか校風とか社風といったものになる。それは、田が他の田と畔によって仕切られているように、その共同体だけにある融和的な感情で、人々に強い団結心と一体感を与えるものである。(平出 2008 : 11)

(51) まず、述部中心であるという特徴は、人がある状況文脈の中にいて言葉を発する際の原始性がよく保存されている事実を示しています。……

このことから、日本語は状況依存型の言語だと言えます。

それだけ人間関係の同質性が高く、情や気脈を通じ合える生活場面が多かったのでしょう。 (小浜 2018 : 200)

(50)での「集団特有の気風や雰囲気」であれ、(51)の「人間関係の同質性が高く、情や気脈を通じ合える生活場面」であれ、これらの基となっているのは、先の(2)で示した「「共有される場」での「共有される知覚感覚体験」」である。これらの特徴が、よく指摘される日本人の「同調志向」につながるものであることはいうまでもあるまい。

また、ハインズ・西光の『日本語らしさと英語らしさ』(1986 : 24-25)には、ハインズが、日本で招待された夕食の後で、どのように食事のお礼を言おうかと思案していたところ、招待された人たちが、全員、「ごちそうさま」と次々に言っていたことにショックを受けたとの記述がある。食事の始まる前と後の、「いただきます」・「ごちそうさま」は、食事という出来事における「開始」・「終了」という「場の枠」の設定と考えられるが、「食事」での「共有される場」があれば、「食事」の開始と終了を伝える発言は、「共有される場」における「共有される感覚体験」を表す「定型表現」で十分であるということになると思われる。逆に、欧米におけるように、「食事」での「共有される場」がないならば、個人というモノは、「場」での雰囲気や空気には影響されず、個人として独立して存在することになり、お礼の言葉に独自性を発揮しなければならないということになる。これは、欧米においてはテニスやゴルフで各人がめいめいの服装やフォームですのと重なる現象である。また、同書で、西光(1986 : 30-31)は、英語はお礼の言葉を個別的で詳しく表現するのに対して、日本人がただ単に、Thank you.とだけ言うと、ソッケナクきこえてしまうと指摘し、日本人が英語で丁寧に言おうとすれば、一味違う自分の個性を発揮せねばならず、かなりの想像力が必要になるとも述べて

いるが、このことについても、個人がコンテキストに依存せず、独立して存在することが関わっていると思われる¹²⁾。

このことに関連すると思われるのが、「お疲れさまです」、「ごくろうさまです」、「よろしくお願いします」といった様々なシチュエーションにおいて用いられる挨拶の定型表現である。このような定型表現が日本語に多いのは、食事の場合と同様、話し手と聞き手に「共有される場」での「共有される感覚体験」があるためである。「共有感」があるのであれば、自分の気持ちを伝えるのに定型表現で十分であるということになる。逆に、定型表現を用いることによって、「共有感」が深まってくるということも考えられる。このような状況においては、英語のように、個性が求められる表現である必要はないのである。

個人としての主体が確立されている西洋と、個人はあくまで全体の中の個人でしかありえない日本における、個の位置づけの違いは、オーケストラと雅楽における指揮者の有無にも関わっていると考えられることも可能であろう。

次は平出（2008：40-41）からの引用である。

(52) 個人を主体とする西洋の場合は、一人の優れた指導者に各人が従う形になり、和を主体とする日本の場合は、皆が心をついに合わせる形になる。例としては指揮者を持つオーケストラと指揮者を持たない雅楽の演奏である。

「場」がない「個人」においては、個人がそれぞれ独立したものとなり、個人をまとめる指揮者の存在が求められることになるであろうし、「場」における個人ということであれば、個人と個人が、心をついに合わせることによって、指揮者をもたないことも可能となろう。

「場」のある言語か否かは、ハグ・握手といった挨拶でのスキンシップ

の有無と関わっている可能性も否定できないようにも思われる。「場」のない文化においては、人というモノはそれだけで独立して存在するモノであるので、挨拶においても、モノである人と人とを密に結びつけるためには、ハグや握手といったモノとモノとの直接的な接触が必要になってくるのではないかと考えられる。一方、「場」のある文化においては、モノである人は「共有される場」でのコトの中の一部に過ぎず、モノとモノは「場」の中で、すでに論じた「間」や「気」を通して関わり合っており、よって、「場」のない文化におけるような直接的なスキンシップであるハグや握手といった挨拶の様式は生み出されなかったと考えることも可能であるかもしれない。

このことに関して、剣持（1992：110）には、次の記述がある。

- (53) ヨーロッパ人は日常のあいさつにおいても、握手→抱擁→接吻というように、直接的な接触をすることが親愛の情の表し方であるが、日本人の挨拶は、ある距離—「間」—をへだてたおじぎである。

剣持はこの日本人のしぐさの「間接的表現」についても、「「間」の感覚」（1992：110）によるものとしているが、本稿の観点からは、「共有される場」での「共有される知覚感覚体験」によるということになる。「場」がない欧米社会においては、「お互いが独立し、そこに潜在的な対立関係があるからこそ、その距離を縮めるために、進んで触れ合おうとする。」（平出 1992：39）ということになるのであろう。

5.3. 李御寧の『「縮み」志向の日本人』（1984）における「座」

次は、李御寧の『「縮み」志向の日本人』（1984）からのものであるが、日本人の行動パターンについての以下の引用も、これまで述べてきたことと関連があると思われる。

- (54) また日本のどの店でも何かを買い、金を払うと、例外なしに「千円おあずかりしました」「一万円おあずかりしました」と手に金を受けながら、必ず確認をして復唱します。そしておつりを渡ししながら「×円お返しします」というのです。ぴったりの金を払ったときには「ちょうどいただきました」です。石橋を叩いて渡るこの確認主義は一見無意味にみえますが、それで売る人と買う人の一種の座をつくっていく方法なのです。そしてときおり小さな店に「誠に勝手ながら、今日は休ませていただきます」という貼り紙がついているのをみると、微苦笑を禁じえません。（李御寧 1984：238）

さらに、李御寧は、日本の車両での「急停車することがありますから、吊り革におつかまり下さい」といった様々な掲示や「次の××駅ではドアは左側が開きます」といったアナウンスが誰に対してであるのかについて次のように述べている。

- (55) そうです。ただ乗る人と乗せる人の「座」をつくらなければ「気が済まない」からなのです。パリであれロンドンであれニューヨークであれ、どこであろうと、電車はひとりで走り、乗客はひとりで乗ったり降りたりします。みんな自分が勝手を知ってやるのです。ところが、東京の駅のホームだけは幼稚園の運動場のようであり、そして乗客をさばく駅員たちは、その先生みたいに搔ゆいところまで手の届く親切ぶりです。つまり、東京の駅のホームには電車と乗客の間に「座」があるのです。それが必要であれ、必要でないにせよ！（李御寧 1984：240）

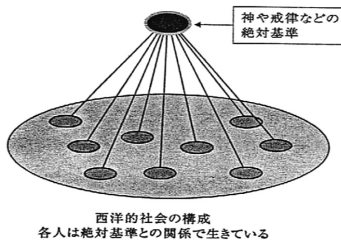
李御寧はこれらの鋭い観察において、上で述べたような店や駅での、人と人とのつながりを「座」と言っているが、この「座」は本稿での「場」

の概念にきわめて近いものであると思われる。しかし、もし、欧米人が彼らの国の店や駅において日本人のような振る舞いをしたとしても、はたして、そこに日本におけるような「座」は生じるだろうか。と言うのも、日本での「場」には、「共有される場」で「共有される知覚感覚体験」のある言語を用いてやりとりしているという状況があるからである。つまり、李御寧が上で述べたような人々のやりとりを観察できたことについては、日本語の事態把握の様式が大きく関わっているのである。

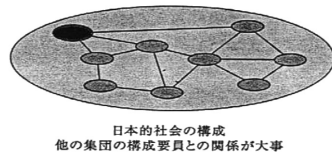
6. 山本 (2012) における「西洋的社会の構成」と「日本的社会的構成」の図

次の図 (山本 2012: 19) は、西洋社会と日本社会の構成のあり方を示したものであるが、(56a) の「垂直型」と (56b) の「水平型」の図は、英語と日本語の特徴のみならず、これまで論じてきた、スポーツや日常的な行動における欧米人と日本人の行動パターンの違いにも当てはまるものであると思われる¹³⁾。

(56) a.



b.



まず、(56a) の「西洋的社会の構成」の図であるが、この垂直型の頂点にある「神や戒律などの絶対基準」は、「場」とは無関係な「神の視点」と見なすことができるとと思われる¹⁴⁾。このような「場」の制約がない「神

の視点」であれば、「Figure/Ground 認知」でもって、透過的に事象を「結果志向」で捉えることが可能となろう。また、そうであれば、先の5.1節の「スポーツにおける日本と欧米の比較」で述べたように、人が自らの行動をする際においては、周囲に影響されることなく、「神の視点」としての「絶対基準」に従うことになり、スポーツの服装やフォームの選択は各自の判断に委ねられることになる。言わば、(56a)の「西洋的社会の構成」の図には「場」が存在していないのである。

これに対し、(56b)の「他の集団の構成要員との関係が大事」ということを示す「日本的社会的構成」の図は、「場」が存在し、「場」におけるコト的事象が、「共有される場」での「共有される知覚感覚体験」によって把握されることを示す図であるとも言える。そうであれば、人が自らの行動をする際においては、自らの判断よりは、「周囲の空気・雰囲気」が優先されるということは大いにあり得るということになる。それはすでに、前号でふれた「笑顔の度合い」についての日本人とアメリカ人の判断の違いと重なる現象である。

また、(56a, b)の図は、木村(1992)が「はしがき」で述べている次の言説と重なるところがあると言える。

(57) 西洋における義務と道徳の枠組に対して日本における義理と人情の枠組が対比され、前者が垂直的に神と結びつき、後者が水平的に「人と人との間」と結びついた拘束性に基づいているものである。

(木村 1992 : iii)

「前者(義務と道徳)が垂直的に神と結びつき、後者(義理と人情)が水平的に「人と人との間」と結びついた拘束性に基づく」との見解は、まさに(56a, b)の図の反映であるとさえ言えよう。

このような「社会の構成の違い」が、先の5.1節で述べたような、ス

ポーツの服装や型・フォームにおける、日本と欧米の違いに通じること
は十分うなずけることである。また、「阿吽の呼吸や以心伝心は、濃厚な
文脈が存在するこの境界内での「場」の内ですご大きな力を発揮する」
(小笠原 206 : 113) ことになり、「共有される場」においては、人間関係
における繋がりが深くなることも予想されることになる¹⁵⁾。

一方、「場」のない「垂直型」の西洋社会においては、「各人」と「神
や戒律などの絶対基準」とのタテの繋がりは強いが、各人の間でのヨコ
の繋がりは弱いということになり、親子関係、夫婦関係についても、根
本的には、他人の関係であるということになると思われる¹⁶⁾。

ここで、本稿ですでに論じた「間」と関りがある「世間」についてふ
れておきたい。新形 (2007 : 73-74) には以下のような記述がある。

(58) 政治家や大企業の社長などが事件の責任をとるとき、……「世間を
お騒がせして申しわけありません」と謝るのが普通です。かれら
は「世間」にむかって、お騒がせしました、と詫びているのです。
かれらにとっては「社会」ではなく、「世間」(＝世間の目)が問題
なのです。世間と社会は違います。世間は明治以前からあった日
本語であり、社会は明治維新以後にできた翻訳語です。阿部謹也
は、社会はヨーロッパの近代において自立した個人の集合体とし
て成立したとのべています。……世間は、生活の場としての世の
中のことであり、はじめから与えられているものであって、それを
変えることなどできないものです。

また、ベルク (1985 : 238) にも、「空間的、時間的に一定の場所を占め
る関係を主体との間に、何らかの形で持つ人々が世間である」との記述
があるが、この記述からは、「場」における個人は、人々の集まりである
「世間」からは独立して存在し得ないと解することも可能である。要す

るに、「世間」と「社会」の違いには、「自立した個人」の概念の成立の有無が関わっていることになるが、この違いには、結局のところ、人間というモノを独立したモノとして捉える「Figure/Ground 認知」の言語か、それとも、人間というモノを「場」でのコトの一部として捉える「知覚感覚体験」の言語かという、言語の認知様式の違いが少なからず関わっていることは認めざるを得ないように思われる。ということは、「社会」と「世間」という社会学での大きな概念における違いにも、言語の事態把握の違いが関わっていることになり、本稿での「場」の射程の有効性が示されたことになろう。

7. 「日本の情」と「西洋の理」はどこからくるのか

本節では、日本人と西洋人の「実在」, 「真の世界のありか」, 「無常」等についての見解の違いについて、主に、野内（2008）の『偶然を生きる思想 「日本の情」と「西洋の理」』での言説を取り上げて、本稿での日英語の事態把握のあり方の違いの見地から考察してみたい。

以下、本節においては引用がかなり多くなるが、まずは、「実在」についてである。

(59) 「ものの哀れを知る」とは物事の本質を認識することとされるが、「うれし」「をかし」「悲し」という感情表現によって例示されるように、その認識のありかたはひたすら感受性によるものなのだ。……

これはなにを意味するだろうか。今ここにあるものしか信じないということである。……

こんなことを言いだすと単純化だとか、極論だとかのそしりを受けるのは承知のうえであえて言わせてもらえば、西洋人と日本人の一番大きな違いは「目に見えないもの」を信じるか信じないか

にある。目に見えないものを西洋人は信じるが、日本人は信じない。いうならば西洋人は観念主義者で、日本人は現実主義者である。(野内 2008 : 38-39)

- (60) プラトンによれば、われわれが住んでいる世界とは別のところに真の世界が存在する。その真の存在をプラトンは「イデア」と呼ぶ。本質的存在、真実在と呼んでも差しつかえないだろう。とにかく不変で永遠で絶対的な世界がこの世界を超えた彼方にあると思念されている。いわばこの世界は影のようなものなのだ。本体・実体は目に見えない彼方にある。われわれの五感が知覚しているものは実は本当に存在しているのではなく、仮象にしかすぎず、真実在の模倣にしかすぎないのである。(野内 2008 : 41)

- (61) いずれにせよ、日本人にとっての「実在」とは、目に見えるもの、耳で聞こえるもの、手で触れるもの、舌で味わえるもの、香りのするもの、そういう具体的なものでしかない。

これに対して、西欧の人たちにとって実在とは、五感で触れる領域の外、すなわち自然を超えたところにある。それを探求する学問が、まさに meta (超えた) + physica (自然) = metaphysics (超自然学) なのだ。私たちが住んでいる世界で目にしているものは、形の定まらぬ流転状態にある、いわば、幻影のようなものであり、真に存在するものは、この世界を超えた彼方にあり、普遍的なものだと考えるのである。(山本 2008 : 56)

- (59), (60), (61)は「実在」や「真実」をめぐる、日本人と西欧人の見解の相違について述べたものであるが、この違いは、野内や山本の指摘を待つまでもなく一般的に認められていることである。ちなみに、山本 (2008 : 58) には、「目に見えるものが幻影で、見に見えないものが実体だと言われて、それをうのみにできる日本人がどれだけいるだろうか」

との記述もある。さて、ここで問題としたいのは、この相違は一体どこからくるのかということである。もし、この違いの中に、日本人と西洋人とを分かち根源的なものがあるとするならば、この違いについても、これまで本稿で論じてきた、日本人と西洋人の「脳内現象」の違い、すなわち、事態把握の様式の違いが、その相違の一端に関わっていると想定することは十分理にかなったことであると思われる。

まず、これらの引用において述べられている日本人は現実主義者であるということについては、日本人の事態把握が「場」での「見えているまま」の「知覚感覚体験」による把握であるとするれば、把握の対象は知覚によって把握できるもの、すなわち現実実在しているものということになり、よって、現実主義者となる可能性は十分考えられるのではないだろうか。ちなみに、森本は、「日本人がつねに現実をそのまま、素直に受け入れる」（森本 2001：105）という主張に関連して、次のような中村元の説に言及している。

(62) 氏（中村元）によれば、日本人の心の底には「現象世界のうちに絶対者を認めようとする思惟方法」が働いており、そうした心性が天台学においても、禅宗の受容に際しても、強く影響して、それが日本の仏教思想を大きく特色づけているという。その例として氏は「諸法実相」の日本的解釈をあげる。「諸法実相」とは、あらゆるもの（諸法）の、ありのままの姿、真実のありよう（実相）ということなのだが、天台学ではそれを「諸法は実相なり」と解釈し、道元に至っては、さらにそれを逆転させて、「実相は諸法なり」と説く。それは、「現象即実在」とする日本の考え方の反映にはかならない。日本人は古来から現実の世界をたんなる現象とは見ず、そこに神、真実が宿っていると確信してきた、と氏は指摘している。

（森本 2001：105）

これに対し、「場」がないメタ認知の「Figure/Ground 認知」の分析的把握であれば、把握対象が知覚対象として実在するものである必要がなくなることから、観念論者になる可能性は十分考えられることなのではないだろうか。(60)のプラトンの「イデア論」や(61)での metaphysics (「形而上学」)といった学問は、「知覚感覚体験」による事態把握の日本人にとっては、到底思いつかなかったような発想であると思われるが、やはりその発想の根底には、メタ認知の「Figure/Ground 認知」での事態把握があったことは否定できないようにも思われる。大野(2001:53)は、「日本人の弱点と思われることを一つ挙げたい。それは、日本人が「体系的な思考」に弱いということである。人間界についても、自然界についても、分析を重ねていって原理・原則を求め、それを全体として観察して構造的に、体系的に把握する力が弱い。」と述べているが、「全体として観察して構造的に、体系的に把握する」ためには、(56a)の「神の視点」が求められよう。この「体系的に把握する力」の弱さは、日本人の弱点というよりは、むしろ、日本語の弱点というべきものであると思われる。「分析を重ねていって原理・原則を求める」プロセスに、「知覚感覚体験」による事態把握はその威力を発揮できないであろう。

次は無常なるものとそれに関わる美意識に対する捉え方の違いである。

(63) 無常な事態に対する身の処し方(において)……西洋人は無常という事態をなんとか解消しようとして理論武装する。ところが、日本人はあっさりと、すんなりと受け容れてしまう。しかもその受け容れ方は思想的、哲学的というよりか多分に感覚的であり、文学的である。(野内 2008:33)

(64) 日本人の美意識には、瞬間的なもの、減びゆくものへの嗜好が確かにあるようだ。言い換えれば日本人は無常なものに美を見いだす

ということだ。……。西洋の人のびとは永遠のもの、無限のもの、不変のものに美を見いだす。また、永遠のもの、無限のもの、不変のものを創り出すことこそが美の創出だと信じている。……。要するに、西洋には「恒常の美学」が厳然として存在する。

(野内 2008 : 25)

日本人が「瞬間的なもの、滅びゆくものに美を見いだす」のに対し、西洋人が「永遠のもの、無限のもの、不変のものに美を見いだす」という、美に対する正反対の感覚も、やはり、そこには、日本人と西洋人の「脳内現象」による認知様式の違いが関わっていることは否定できないようにも思われる。「知覚感覚体験」において美の対象となるものは、少なくとも「場」での「時空間」での「場の枠内」に存在するものでなければならない。

ドナルド・キーン (1979 : 73) は、『徒然草』の一節にふれて、次のように述べている。

(65) 「さだめなきこそ、いみじけれ」という美意識を、人は日本以外のどこに求めうるだろうか。それは、西欧文化の底を流れる古代ギリシアの思想を、真っ向から否定したもの、そして真に日本的なるもの、である。

「ものは、定めがないからこそ美しい。桜花は、散るからこそ美しい。」(キーン 1979 : 74) とする感覚は、「知覚感覚体験」によって、「場」での「時の推移」を体感できる感覚がなければ生じ得なかった美意識であると言ってもよいであろう。「感覚体験」の言語化であれば、当然、そこに話者の情意が含まれるということになる。一方、メタ認知の分析的な「Figure/Ground 認知」では、「場」での「時の推移」を把握できず、美

の対象となるものは「時空間」の「場の枠」がない、言わば、「場」のない「永遠のもの、無限のもの、不変のもの」ということになる。まさに美意識の対象となるものは、「恒常の美」なのである。

欧米人の「永遠なるもの」に美を見出す美意識と日本人の「無常なるもの」に美を見出す美意識との違いは、次の高階（2015：166-167）の言う「実体の美」と「状況の美」にそれぞれ相当すると思われる。

(66)「実体の美」は、そのものの自体が美を表わしているのだから、状況がどう変わろうと、いつでも、どこでも「美」であり得る。《ミロのヴィーナス》は、紀元前一世紀にギリシアの植民地であった地中海のある島で造られたが、二世紀の今日、パリのルーヴル美術館に並べられていてもその美しさに変わりはない。仮に砂漠のなかにはぽつんと置かれても、同じように「美」を主張するであろう。だが、「状況の美」は、状況が変われば当然消えてしまう。春の曙や秋の夕暮れの美しさは、長くは続かない。状況の美に敏感に反応する日本人は、それゆえにまた、美とは万古不易のものではなく、うつろいやすいもの、はかないものという感覚を育てて来た。うつろいやすいものであるがゆえに、いっそう貴重で、いっそう愛すべきものという感覚である。

《ミロのヴィーナス》が「実体の美」とされるのは、このモノの美はいわば、「永遠のもの、無限のもの、不変のもの」とも言えるものだからである。これは（60）でのプラトンのアイデア論に通じる考え方であり、「Figure/Ground 認知」で把握される、「場」での「時」、「場所」、「状況」等が何ら関与しない美である。一方、「春の曙や秋の夕暮れの美しさ」が「状況の美」とされるのは、これらのコト的事象の美には、発話の「場」において「場の枠」となる「時」、「場所」、「背景」の「状況」全般が関

わっているためである。その意味で、「実体の美」と「状況の美」とは、それぞれ、「Figure/Ground 認知」と「知覚感覚体験」によって、把握される美であるとも言え、先に、(45)で述べた、「場」のある日本語では、モノはコトの一部でしかないが、「場」のない英語では、モノはモノとして独立して存在し得るということと関わってこよう。モノは不変でありうるが、コトは「場」での「時」と共に、一瞬一瞬のうちに変化していくのである。この美に対する違いは、また、前号で論じた登場人物というモノに焦点が置かれた欧米の映画ポスター、背景というコト全体が把握の対象とされた日本の映画ポスターにも通じるものでもある。

さて、(64)においては、「無限のもの」が美意識との関連で述べられているのであるが、「無限のもの」が「イマ、ココ」の「場」での「知覚感覚体験」として把握しにくいということとの関連において言うならば、このことは、日本が「海洋帝国となる潜在的な手段を備えていたのに、日本は陸上の国として留まるという歴史的選択を行なった」（ベルク 1988：60）、「海国であるのに、海国らしからぬ歴史をあゆんできた」（松岡 2006：214）ということにも、ひょっとして関わっている可能性も否定できないようにも思われる。すなわち、海は、陸に比べれば、その広大さと単調さのために、「場」での「時空間」の境界設定がはるかにしにくく、よって、「海」の「場」でのコト的事象を「知覚感覚体験」としては捉えにくかったとは言えるのではないだろうか。

このことについては、さらに芳賀（2013：158）の以下の指摘もあげておきたい。

(67) もっぱら内向きにコツコツといそしんできた日本人には“「縮み志向」という、まさに凹型の姿勢が身についています。「日本は四方を海にかこまれていながらも、海洋民族になっていないのです」

(李御寧『「縮み」志向の日本人』)と痛い所をつかれました。“対人恐怖症” 対外版でしょう。

広い外界が見えない、また乗り出す志向がない。海を見ても見える範囲だけで、水平線のかなたは知ろうとせず、「太平洋」に日本人が命名することはなかった。日向灘、熊野灘、遠州灘、鹿島灘…と、海べりの地域の名が付けられる範囲に視野が限られていました。

「見える範囲の海」であれば、「海は広いな、大きいな。月がのぼるし、日が沈む。」のように、境界設定が可能な「場」でのコト的事象が「知覚感覚体験」されることは可能であろう。この意味では、「知覚感覚体験」が及ぶ射程と「場」の境界は、重なり合うとしてよいのかもしれない。「日向灘、熊野灘、遠州灘、鹿島灘…と海べりの地域の名が付けられる範囲」に活動が限られていた要因の一端に、多分に日本人の「場」での「知覚感覚体験」による捉え方が何らかの仕方に関わっていたということは否定できないようにも思われる。海は広大で単調なものであるが、それよりも、さらに無限で広大で「知覚感覚体験」が及ばぬ世界として宇宙がある。日本人が宇宙や無限や抽象的なものについての思索が少ないことにも日本人が「脳内現象」に起因するところの「知覚感覚体験」で事象を把握する「現実主義者」であることが関わっていたのかもしれない。

「ギリシア人は五感が指し示す証拠を否定することに喜びを覚えるような人々だった」(ニスベット 2004: 187) とのことであるが、ギリシア人のこのような志向は、彼らの話す言語が「Figure/Ground 認知」で事象を把握する言語であったからこそ可能だったのであり、逆に、日本人がそうはありえなかったのは、日本語が「知覚感覚体験」で事象を把握する言語であったためであるということは少なくとも言えるように思われる。

最後に、本節の見出しである、「日本の情」と「西洋の理」はどこからくるのか」との問いに対してあえて答えるならば、「日本の情」は、体験的な「知覚感覚体験」による事態把握、「西洋の理」はメタ認知の分析的な「Figure/Ground 認知」による事態把握という、それぞれの言語の異なった事態把握の様式からくるということになるだろうか¹⁷⁾。

8. まとめ

これまで、日本語の「知覚感覚体験」による事態把握と、英語の「Figure/Ground 認知」による事態把握の違いは、言語のみならず、日本と欧米での生活様式・行動様式における違いの要因となっている可能性があることを見てきた。さらには、「実在」や「美」に対する捉え方の違いの要因にもなっている可能性についても見てきた。

最後に、ニスベット (2003), 増田 (2010) のいう、世界の人々の「包括的」と「分析的」な見方についてふれておきたい。ニスベットは次のように述べている。

- (68) 世界は単に概念の上で異なっているだけではなく、人々は文字どおり世界を異なったものとして「見て」いる。アジア人は「ビッグ・ピクチャー」を見ており、人や物を環境との関わりの中で認識する。それゆえ、彼らにとっては、環境から物を切り離して知覚することは難しい。西洋人は、環境を無視して人や物に焦点を当てる見方をしている。文字どおり、西洋人の眼に映る物の数や、その環境のなかで見出される関係の数は、アジア人が見るほど多くはない。
(ニスベット 2004 : 126)

本書での観点からは、「世界を異なったものとして「見て」いる」とは、同じ世界を、「知覚感覚体験」として「体験的」に捉えるか、それとも、

「Figure/Ground 認知」として「分析的」に捉えるかということになる。「場」に存在するコト的事象を「包括的」に「知覚感覚体験」で捉えるならば、モノはあくまでコトの一部として存在することになるので、「環境から物を切り離して知覚することは難しい」ということになるだろうし、「分析的」に「Figure/Ground 認知」で把握するならば、モノはモノとして独立・自立して存在することになるので、「環境を無視して人や物に焦点を当てる見方をしている」ということになる。

それゆえ、〈木〉を把握対象とすると、「知覚感覚体験」で把握されるならば、モノである木は、「場」の背景的な「ビッグ・ピクチャー」のコトである Ground の〈森〉の一部として把握されることになるであろうし、「Figure/Ground 認知」で把握されるならば、「場」がないため、モノである Figure の〈木〉そのものが把握されるということになろう。その意味で、ニスベット (2003) の原題である *The Geography of Thought* (思考の地理学) を、『木を見る西洋人 森を見る東洋人』というタイトルにしたのは、日英語の事態把握のあり方の特徴を捉えた見事な翻訳であると言えるかもしれない。

本稿では、「場」の有無の観点から、幾つかのトピックにおいて、日本語・日本文化と英語・英語文化の比較をしてきた。扱ったトピックの範囲はきわめて限られたものであったが、これらの比較対照研究において、「場」の概念が有効であることの一端は示すことができたのではないかと思う。

*札幌大学教授濱田英人氏には、本稿の草稿を読んでいただき、貴重な助言をいただくことができた。記して、感謝の意を伝えたい。

注

- 1) 「時」の感覚が表れていない例については、前号の尾野 (2022: 17-20)

の例文(20)を参照されたい。

- 2) 「気分」という語については、芳賀（2013：21）の次の記述を紹介しておきたい。

(i) そこで思い出しました。十何年か前、ルーマニアから弘前大学に留学していたベルチャ・クリスティーナさんという女子学生がいました。彼女は早く日本社会に溶け込みたくて、茶道や空手の部活動もしてみたが、どこか不完全燃焼だと感じた。そのうちに、日本人相互の会話、コミュニケーションを観察している間に、「日本人の佳さがわかってきた」—それは、パートナーの^い気分を尊重することだ！と。

- 3) 日本語表現の〈情意性〉については、尾野（2018：144-145）の7.3.2節の「日本語表現の「情意性」」を参考のこと。

小説の日本語と英語の比較対照については、宗宮（2012：193-215）の「第5章 小説が伝える「ものの見方」」が参考になるが、この宗宮の見解については、尾野（2018：78）も参照されたい。

また、宗宮（2012：206）には、「本来なら原文に忠実であるべき翻訳で、英語がこのように独自の見方をうち出すのは、英語の世界がきっちり構造化されているからである。全体と部分、外と内、時間の前後といった、現実の世界を成り立たせる諸々の関係が、英語が作り出す小説の世界をも支配している。それに対して日本語の世界は、自分の関心をひくことがらで成り立っている。」との記述があるが、本稿での「場」の観点からは、日本語の記述が「場」での「感覚体験」によるものなので、当然、「感覚的に」に「自分の関心をひくことがら」の世界となると思われる。一方、「場」のない英語であれば、「分析」的で理詰めの記述となるので、「きっちり構造化」された世界となろう。

熊倉（2011：50）でも、「体験を経て自分の語彙となるやまとことばは、否応なしに「主観」性を帯びます」と述べられている。

また、小浜（2018：208）には、「自然（周囲の世界）を客観的に対象化するために、デカルトはあえてそれを死物化したわけですが、自然の

中に虫として入ってしまう日本人にはそれはできない芸当で、だから前近代の日本では自然科学が発達しませんでした。言葉のあり方と、認識態度とは、どちらが先ということもなく、このように対応関係にあるわけです。この「虫の視点」は、「気にかける視点」、また「神の視点」は「突き放す視点」とも言い換えることができます。」との記述があるが、「虫の視点」は、「気にかける視点」、また「神の視点」は「突き放す視点」とは言い得て妙であるかもしれない。と言うのも、本稿で扱った「気分」、「気配」等の語も、「気にかける視点」とも言えるからである。

- 4) この荒木の言説は、日本語の主観性と密接なつながりのあるものと思われるが、このことについては、本文の注(17)も参照されたい。
- 5) 剣持(1992)『「間」の日本文化』(朝文社)は、剣持(1978)『「間」の日本文化』(講談社現代新書)の新装版であり、内容は同一のものであるが、本文で引用した例文(35)については、剣持(1992)で新たに付け加えられた「まえがき」にあるもので、剣持(1978)にはない。
- 6) 手紙の執筆における、「コト的伝達」・「モノ的伝達」は、それぞれ、映画ポスターの画像において、前号の尾野(2022:48)の(56)で述べた、「登場人物が心象風景(背景画像)の一部として現れる」日本版ポスターと、「心象風景(背景画像)がなく登場人物のみ現れる」英米版ポスターに相当すると見なすことも可能であろう。
- 7) 山中(1998:208-216)、樋口(2004:131-133)でも扱われている。
- 8) 英語のパラグラフがトピックセンテンスから始まるのに対し、日本語のパラグラフは「起」から始まるということは、日本語は「目印を順にたどるように表現します」のに対して、英語は「重要なモノをまず表現して、そのモノに説明を付け加えていきます」(濱田(2019:19))ということに重なり合う現象である。
- 9) 日本人が、「境界設定」を好むことについては、小笠原(2006:92)に次のような記述もある。

- (i) 小学生の娘がイギリスの学校に通っていたのだが、ある日算数の宿題に、「ここに、二〇〇〇から三〇〇〇までの線分がプロット(表

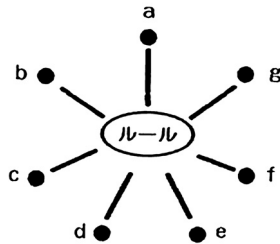
示) されています。三三五〇はどこかプロットしなさい」というものがあつた。ちょっと面白いなと感じたが、大人から見れば、別段難しいわけではない。しかし、娘は首をひねっている。なぜと聞くと、日本の学校で同じ問題が出れば、二〇〇〇と三〇〇〇の間の数字を聞いてくるというのである。……考えてみれば、日本の考え方は、この例にもれず、拡大していくのではなく、範囲を決めてそれを細かくしていく傾向が強いと感じることが多い。

- 10) (43)のランバートと(44)のR.ホワイティングの引用は、李御寧(1984)の『「縮み」志向の日本人』での指摘による。
- 11) 筆者は、本務校の海外語学研修の引率先であつた Warwickshire College Rugby 校で避難訓練の経験がある。もちろん、大学の規模、避難訓練の位置づけ等で、単純な比較はできないのであるが、Rugby 校での避難訓練は、バラバラで全員がただ外にでただけであつたような印象がある。皆が外にでたあと、本学におけるように、全員が整列し、講評といったようなものがあるわけではない。まさに、避難訓練という「場」がないのである。それに比べれば、本学の避難訓練は、十分な計画と準備に基づき、教職員・学生が一体となつたもので、「〇〇から出火しました」との全校アナウンスで始まり、全員が決められた場所の集合した後に講評があり、まさに、避難訓練という「場」での「開始」と「終了」もはっきりしたものとなっている。ちなみに、2009年2月26日(木)の筆者の「ラグビー引率日記」には次の記述がある。「(午後の)授業の終わり近くなり、避難訓練があり、校舎にいる全員がそとに出る。もちろん、武蔵の避難訓練のようなきっちりと準備されたものではない。」
- 12) 「個性の発揮」については、尾野(2004: 87, 注11(101-103))も参照されたい。もっとも、このことについても、「場」のある言語においては、「共有される場」において「共有される感覚」を体験することになり、大津(1993: 221)で指摘されているように、和歌においては、「なりにけるかも」の語が幾世代にもわたって用いられるということになる。これに対し、話し手と聞き手に「共有される場」のない言語においては、お

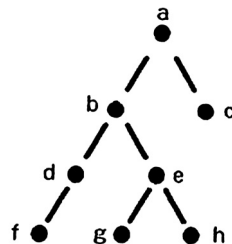
のずと「個性の発揮」が求められることとなる。

- 13) 西洋社会と日本社会における人間関係の違いを図示したものとしては、中根（1967）の『タテ社会の人間関係』がよく引用される。この中根の説について、熊谷（2011）は、「日本人の人間関係は、(ib) のように二者関係を基礎にしてタテにつながっていく形であり、欧米の人間関係は (ia) のように、集団の成員がみな同じ資格でヨコにつながる形である。タテの関係にある人をつなぐの二者が共有する場であり、ヨコの関係にある人をつなぐのはルールである」（熊谷 2011：130-131, (ia) と (ib) の図も熊谷より借用）と解説している。

(i) a



b



この中根の図と本文中の山本の図(56)を比べると、(56)の西欧と日本の人間関係を表した図は、「場」のある日本語と「場」のない英語という、「場」の有無の違いに重なるものであるが、中根の図 (ia) と (ib) の図は、本稿で問題にしている言語の「場」の有無とは重ならない。例えば、(ia) の図での「ルール」であるが、もし従うのが「ルール」だとすれば、全員が同じ服装や同じフォームを命じるルールである場合もあり得ることになる。従うのは、「ルール」ではなく、各人にとっての「神の視点」とも言うべき「絶対基準」なのである。さらに、(ib) の図で問題であると思われるのは、a から h まで全員が同じ「場」を共有しているのであるが、(ib) の図では、そのことは表し得ないということである。

少なくとも、「場」の観点からすれば、西欧社会は、個人と「神や戒律

などの絶対基準」との結びつきが強い垂直型（タテ型）であり、日本社会は、周囲にいる構成員との関係が大事な水平型（ヨコ型）ということになる。平出（2008：32）にも、「ちょうど日本のタテ社会が潜在的な平等性を持つと同様、西洋のヨコ社会は潜在的な支配・被支配の構造を持つ。」との記述がある。

- 14) また、この山本の図は、日本と西洋の宇宙観、宗教観とも重なり合うかもしれない。芳賀（2013：182-186）には、「一神の世界、多神の世界 垂直型と水平型—相容れぬ世界像」という章に以下の記述がある。

(i) 他方、荒涼たる砂漠に星の降る乾燥の地に生じた一神教は、神（God）を人間の上に仰ぎ、そして家畜をはじめとする動物を人間の下に置きます。神—人間—動物。三者の区別は厳格をきわめ、三者は互いに断絶して相互融通がありません。タテ線、垂直の宇宙像が人の心に根をおろしています。[……] 特に、一神教の信仰の確立された社会では、頂点には神が厳然と存在し、人間を経て動物に至るタテ線のワク組みが崩れることなく続いてきました。〈中略〉

……牧畜の伝統の皆無だった日本列島などは、神も人間も動植物も、連続して、水平に横並び、すべてが同じに生命を恵まれ生々躍動する宇宙像が描かれ、日本民族の脳中に受け継がれてきました。八百万の神々が息づく永遠のアニミズムの世界は、〈水平型（包括的）宇宙像〉の世界です。……日本の神は God ではなく、人間と横並びの、いわば仲間であって、天にまします存在とははっきり異なり、すぐ手の届くところにいる隣人です。

確かに、「一神の世界、多神の世界」は、図（56）の垂直型と水平型に重なると思われる。また、「一神の世界」と「Figure/Ground 認知」、「多神の世界」と「知覚感覚体験」には、それぞれ、少なくとも何らかの関連性はあるように思われる。

- 15) 日本人の人間関係と欧米人の人間関係の違いについては、尾野（2018：148-153）の 7.3.5 節の「集団文化と個人文化」も参照されたい。

16) 平出 (2008: 60-61) にも以下の記述がある。

- (i) また、子供も、両親から離れ、ひとりの人間として独立すること
に喜びと誇りを感じる。だから外に向かうとき、相手は誰であつても、たとえ自分の親であっても、I に対する you として、自分が
対等に向かい合うべき存在となる。その関係は日本のような依存
関係ではなく、対立する関係であり、それが西洋の人間関係、お
よび社会風土を父子的なものにしている。

17) 「日本の情」は、「日本語の主観性」とも直結する問題である。日本語の主観性については、安西 (2000: 121) が、「もし時枝文法でいうように、日本語の文がかならず詞と辞の結合によって作られ、客観的な詞を辞の主観性が包み込むという構成になっているのだとすれば、日本語の表現は決定的に主観的であるということになる。主観の裏うちがなければ、表現は表現として完結しないことになるからだ。」と述べている。確かに、日本語の主観性については、この安西の指摘はもっともであるとは言える。ただ、それと同時に、このことについては、本稿の 3.3 節「日本語表現と英語表現の根源的な違い」で論じたように、「物語が語り手の「発話のイマ」の「知覚感覚体験」によって述べられるとすれば、物語には「語りの場」での語り手の「感覚体験」、すなわち、「臨場感」が必然的に表れることになる」、つまり、荒木の言う「日本語の文は話し手（語り手・書き手）の声を消すことができない（荒木 1990: 77）」ということになり、このことこそが、「日本語の主観性」により直結する事柄ではないだろうか。

引用文献

- 荒木博之. 1985. 『やまとことばの人類学』朝日選書.
荒木博之. 1990. 『日本人の表現力と個性』中公新書.
有馬道子. 2015. 『日英語と文化の記号論』（開拓社言語・文化選書）開拓社.
有馬道子. 2018. 『記号論から見た俳句』（開拓社言語・文化選書）開拓社.
安西徹雄. 2000. 『英語の発想』ちくま学芸文庫.

- 李御寧. 1984. 『「縮み」志向の日本人』 講談社文庫.
- 池上嘉彦. 2000. 『「日本語論」への招待』 講談社.
- 大津栄一郎. 1993. 『英語の感覚（下）』 岩波新書.
- 大野晋. 2001. 「日本人は日本語をどう作り上げてきたか」（大野晋・森本哲郎・鈴木孝夫共著）『日本・日本語・日本人』 新潮選書.
- 小笠原泰. 2006. 『なんとなく、日本人』 PHP 研究所.
- 尾野治彦. 2004. 「日英語の映画のタイトルにおける表現の違いをめぐって——「感覚のスキーマ」と「行為のスキーマ」の観点から——」『北海道武蔵女子短期大学紀要』 第 36 号, 63-110.
- 尾野治彦. 2018. 『「視点」の違いから見る 日英語の表現と文化の比較』（開拓社言語・文化選書）開拓社.
- 尾野治彦. 2022. 「「場」のある日本語と日本文化・「場」のない英語と英語文化(1)——「絵本」と「映画ポスター」にも関連して——」『北海道武蔵女子短期大学紀要』 第 54 号, 1-66.
- 加藤恭子・ハーディ, V. 1992. 『英語小論文の書き方 英語のロジック・日本語のロジック』 講談社現代新書.
- 金谷武洋. 2019. 『述語制言語の日本語と日本文化』 文化科学高等研究院出版局.
- 木村敏. 1972. 『人と人との間——精神病理学的日本論——』 弘文堂.
- キーン, D. 1979. 『日本文学のなかへ』 文芸春秋.
- 熊谷高幸. 2011. 『日本語は映像的である』 新曜社.
- 熊山晶久. 1991. 『水性文化と油性文化』 大修館書店.
- 剣持武彦. 1992. 『「間」の日本文化』 朝文社.
- 小浜逸郎. 2018. 『日本語は哲学する言語である』 徳間書店.
- 宗宮喜代子. 2012. 『文化の観点から見た文法の日英対照』 ひつじ書房.
- 高階秀爾. 1015. 『日本人にとって美しさとは何か』 筑摩書房.
- 中根千枝. 1967. 『タテ社会の人間関係』 講談社現代新書.
- 中野研一郎. 2017. 『認知言語類型論原理——「主体化」と「客体化」の認知メカニズム』 京都大学学術出版会.

- 新形信和. 2007. 『日本人の〈わたし〉を求めて 比較文化論のすすめ』新曜社.
- ニスベット, R.E. 2004. 『木を見る西洋人 森を見る東洋人』(村本由紀子訳), ダイヤモンド社.
- 野内良三. 2008. 『偶然を生きる思想 「日本の情」と「西洋の理」』NHK ブックス.
- Hinds, J.・西光義弘 1986. 『*Situation vs. Person Focus*/日本語らしさと英語らしさ』くろしお出版.
- 芳賀綏. 2004. 『日本人らしさの構造』大修館書店.
- 芳賀綏. 2013. 『日本人らしさの発見』大修館書店.
- 濱田英人. 2019. 『脳のしくみが解れば英語が見える』開拓社.
- Pinnington, A.J. 1986. *Inside Out* (『裏返し — 英語教育と日本文化』) 三修社.
- 樋口万里子・大橋浩. 2004. 「第4章 節を越えて:思考を紡ぐ情報構造」『認知コミュニケーション論 (シリーズ認知言語学入門 第6巻)』, 大堀壽夫(編), 101-136, 大修館書店.
- 平出昌嗣. 2008. 『踊る羊と実る稲 — 日欧比較文化・日英比較言語への招待 —』学術出版会.
- ベルク, A. 1985. 『空間の日本文化』(宮原信訳), 筑摩書房.
- ベルク, A. 1988. 『風土の日本』(篠田勝英訳), 筑摩書房.
- ホワイティング, R. 『菊とバット』(松井みどり訳), 早川書房.
- 本多啓. 2005. 『アフォーダンスの認知意味論』東京大学出版会.
- 牧野成一. 1978. 『ことばと空間』東海大学出版会.
- 増田貴彦. 2010. 『ボスだけを見る欧米人 みんなの顔まで見る日本人』講談社+α新書.
- 松岡正剛. 2006. 『日本という方法 おもかげ・うつろいの文化』NHK ブックス.
- 森田良行. 1986. 『基礎日本語辞典』角川書店.
- 森本哲郎. 2001. 「日本人は言葉とどうつきあってきたか」(大野晋・森本哲郎・鈴木孝夫共著)『日本・日本語・日本人』新潮選書.

- 山中桂一. 1998. 『日本語のかたち 対照言語学からのアプローチ』東京大学出版会.
- 山本英一. 2008. 「言語研究の底を流れる思想を考える ― 推論様式を手掛かりとして ―」『関西大学外国語教育研究』第16巻, 47-61.
- 山本哲士. 2012. 「金谷日本語論のエッセンス」『金谷武洋の日本語論』Iichiko. WINTER 2012 No.113. 文化科学高等研究院出版局.
- 山本哲士. 2021. 『哲学する日本 非分離・述語制・場所・非自己』文化科学高等研究院出版局.
- ランバート, J. 1965. 『紅毛日本談義』(山本あき訳), 毎日新聞社.

用例出典

日本語原文のもの

- 内田康夫. 1985. 『戸隠伝説殺人事件』角川文庫.
The Togakushi Legend Murders. David J. Selis (tr.). 1994. Tuttle Publishing.
- 遠藤周作. 1981. 『沈黙』新潮文庫.
Silence. William Johnston (tr.). 1969. Taplinger Publishing Company.
- 川端康成. 1947. 『雪国』新潮文庫.
Snow Country. Edward G. Seidensticker (tr.). 1956. Vintage International, New York.
- 北杜夫. 1964. 『楡家の人びと 第一部 第二部 第三部』新潮文庫.
The House of Nire. Dennis Keene (tr.). 1984. Kodansha International.
- 夏目漱石. 1951. 『こころ』角川文庫.
Kokoro. Edwin McClellan (tr.). 1969. Tuttle Publishing.
- 乃南アサ. 1996. 『凍える牙』新潮文庫.
The Hunter. Juliet Winters Carpenter (tr.). 2006. Kodansha International.
- 松本清張. 1971. 『点と線』新潮文庫.
Points and Lines. Makiko Yamamoto and Paul C. Blum (tr.). 1970. Kodansha International.

英語原文のもの

Beskow, E. 1982. *Olle's Ski Trip* (English Translation by Forsell, K.) ラボ教育センター.

『ウツレと冬の森』おのでらゆりこ (訳) 1981. らくだ出版.

Burton, V.L. 1999. *Choo Choo*. ラボ教育センター.

『いたずらきかんしゃ ちゅうちゅう』むらおかはなこ (訳). 1961. 福音館書店.

Doyle, A.C. 1982. *The Adventures of Sherlock Holmes*. Penguin Books.

『シャーロック・ホームズの冒険』延原謙 (訳). 1953. 新潮文庫.

Hailey, A. 1966. *Hotel*. Bantam Books.

『ホテル (下)』高橋豊 (訳). 1974. 新潮文庫.

Hailey, A. 1976. *The Moneychangers*. Bantam Books.

『マネーチェンジャーズ (上)』永井淳 (訳). 1978. 新潮文庫.

Steinbeck, J. 1967. *The Grapes of Wrath*. Penguin Classics.

『怒りの葡萄 (上)』大久保康雄 (訳). 1967. 新潮文庫.

Twain, M. 1986. *The Adventures of Tom Sawyer*. Penguin Classics.

『トム・ソーヤーの冒険』大久保康雄 (訳). 1953. 新潮文庫.

『新潮文庫の100冊』CD-ROM版 (1995) 新潮社.

